

今の社会は市場経済が
隅々まで行き渡り、大規
模なシステム化が進んで
いる。農業も例外でな
い。工業製品と同じ感覚
で消費者からは、均質な
農産物が求められてい
る。大量にできると、買
いに関係なく価格が安くな
る。一部には有機野菜へ
の関心もあるが、消費者
が求めているのは「有機
栽培の雰囲気がある工業
製品のような見栄えのい
い野菜」ではない。

根本にあるのは消費者
の「面倒くさい」という
思いであり、消費者が愚
かしいと感じる。もっと
食べることにエネルギー
を使ってもいいのではな
いか。

何が幸せなのかを考え
ると、売れば売れるほ

にっぽん 未来図

農へのまなざし 第11部 ⑥

“閉じる社会”も大事

適正規模の生活守れ

市場原理からいえば、
お寺も檀家（だんか）を
ほとんど増やせばいいの
だろうが、それでは住職
として全員のことをよく

生活が守れるように国は
配慮しなくてはいけない
はずだ。

模なシステム化が必要に
なる。逆に、ある程度狭
い地域で地産地消する

品に頼ることになる。自
らは食べないかもしれない
人が生産する海外の食
料に頼るのは、極めて危
ない。見栄えしか気にし
なくなるからだ。

は大きだろう。農家は
自分の感覚や経験を積み
重ねて農産物の出来を判
断してきたのに、それが
否定され出荷できなくな
る。努力とは関係なく、
機械で測った放射性物質
の数値による審判を仰ぐ
しかない。農業の基本で
ある土地も汚された。こ
の状態が続けば、農家に
とっては生きていられな
いような事態だ。

グローバルゼーション
（国際化）ばかりが強調
されるが、社会を外へ開
いていったときに勝ち抜
くには、どうしても大規

《閉じる社会》という考え
方も大事になってくる。
農業でいえば、市場原
理を徹底すれば、結局は
競争力がある安い輸入食

ところが今回の福島第
1原発事故による放射能
汚染で、地産地消とばか
りも言えなくなっていま
った。「諸行無常」という

技術開発を含め、諦め
ずに除染することが大事
だ。大概のことは人間が
手を掛けるという方向に
いかないと思うが、今回
ばかりは人間の力を使っ
て自然と共同して、「無
常の力」による浄化を期
待したい。（おわり）



臨濟宗福聚寺住職、作家
玄侑 宗久さん

げんゆう・そうきゅう 1956年、
福島県三春町生まれ。2001年『中陰
の花』で第125回芥川賞を受賞。08年
から同町の臨濟宗妙心寺派福聚寺住
職。09年から京都・花園大学文学部
国際禅学科客員教授。政府の東日本
大震災復興構想会議委員も務める。

仏教の基本も言いくく
なった。諸行無常は、今
栄えているものが長くは
続かないとか、今駄目で
も少したては事情は変わ
るから悲観しないで、と
いう画面の意味がある。
日本人の生活感覚を表す
言葉だ。しかし放射性物
質の半減期は、ものによ
って30年、数万年、数億
年と、あまりに長い。
特に農業へのショック

（社公三、千本木啓文、
岡信吾、立石寧彦、西野
拓郎、木村俊哉が担当し
ました）